

〈はじめに〉

「公園に子どもが3人、いました。でも、1人、帰りました。いま、公園に、子どもは何人いますか？」この算数文章題の答えは、「2人」でいいかと思います。どうして、不安げな言い方をしているかと言うと、答えに、ちょっと自信がありません。たとえば、この問題を、ことばのテーブルに来ている子どもたちに出題した場合、「2人」とは異なる解答(応答)が、たくさん寄せられるからです。

「3人」「1人」「4人」「10人」「だれもいない」「子どもってだれ?」「それ、どんな公園?」「今日、わたし、公園なんて行ってないよ」 etc..

それらの答えを、能力の未熟さに求めることは、容易ですが、しかし、それでいいのだろうか、と考えてしまいます。「2人」以外の答えは、確かに常識的には、誤りでしょう。しかし、多くの子どもが、この問題を誤る、もしくは問題として捉えることができていない、という現実を前にすると、できる、ということよりも、できない、ということに大きな意味を感じてしまいます。◆いま、「常識的には」と述べましたが、そのことばの通りに、算数文章題は、さまざまな「常識」を前提としている問題です。実際、先ほど挙げたような誤答や的外れな応答は、この常識を踏まえていないことから生じていることが多いように思います。たとえば、「だって、そのあと戻ってきたかもよ」と、つつこみを入れて来る子どもは、問題に書いていないことは起こらない、ということが、わかっていません。「どんな公園?」と尋ねて来る子どもは、テーマ(問題解決)と無関係なことは書かれていない、ということが、わかっていません。それらはみんな、当たり前のことですが、その当たり前が共有されていない子どもには、いったいなぜ、自分が答えを間違えて、叱られているのかさえ、わからないでしょう。

◆“発達障害の子どもにとって、算数文章題は激しく難しい” 思わず椎名誠さんの表現になってしまいましたが、まず、そこを押えておかなければいけないのだと思います。語彙や文法も難しいし、内容のイメージ化も難しい。そして問題を通底している常識の共有も難しい。人工的な学習や教材で、そうたやすく、できるようになるものではない、ということ、指導者や家族は知る必要があります。そこをスタートラインにして、それでも、発達障害の子どもに、算数文章題に取り組んでもらいたいと考えます。冒頭にあげたような、ごく初歩的な問題だけでも、解けるようになれば、と思います。それはきっと、算数としては、生活の役には立たないかも知れません。しかし、その文章題を、常識を共有して、みんなと同じ答えが出せる、ということに大きな意味があります。今回は、新しく製作した「算数文章題準備ワーク」という教材を題材として、算数文章題の持つ意義と、その学習の工夫について、お話して行きたいと思います。